

技が輝く

名古屋友禅

名古屋友禅の起源は、消費文化華やかな尾張藩主徳川宗春のころ（一七三〇年から一七三九年）に、京都、江戸などから友禅師が往来し、その技法が伝えられたことに始まります。宗春失脚後、質素儉約が励行されるようになると、模様の色数も色数を控えたものとなりました。名古屋友禅の特徴は、使用する色数を三色程度に制限し、白を交えて色の濃淡を強調し、それにより奥行きを求めるとともに、渋みを加えた



名古屋友禅の制作風景

渋さを特徴とする名古屋友禅



落ち着きのある上品な色調にしていくところにあります。

完成した作品は、あでやかな京友禅の「雅」でもなく、加賀五彩を基調とする加賀友禅の「豪華」でもなく、淡彩の中に幽玄さを秘めた「渋さ」をもっており、振袖、留袖、訪問着などとして、多くの人々に愛されています。

名古屋友禅は、昭和五十八年、国の伝統的工芸品に指定されています。

愛知県

名古屋友禅 名古屋黒紋付染

名古屋黒紋付染

名古屋における黒紋付染は、江戸時代の初期には既に製造が始まっていた、と考えられます。呉服紺屋小坂井家の由緒を調べた「闇秘録」によると、慶長十五

年（一六一〇年）に紺屋頭の小板井新左衛門が尾張藩内の旗、幟などの製造調達にあたっていたとの記述があります。

京都などほかの産地では、注文後に紋を描き入れる石持という技法ですが、名古屋黒紋付染は、紋型紙板縮めの技法に特徴があります。六千種類を越す紋章ごとに、和紙を何枚も貼り合わせたものに青花液で定紋型を写し、手彫刀で紋章の輪郭を彫って紋型紙を作ります。

仕上がりの美しい名古屋黒紋付染



この紋型紙を生地に貼り付け、両面から紋当金網というもので押さえ締め付けて染色すると、紋型部分が染色されず白く残ります。下染の後、黒染に移ります。ここでの特徴は、染液の濃度を薄めにし、ゆっくりと時間をかけて染めていくことです。

こうしてできあがった作品は、黒色の艶があり、紋の部分の堅牢度、仕上がりの美しさは、ほかに真似できない素晴らしいものとなります。

名古屋黒紋付染は、昭和五十八年、国の伝統的工芸品に指定されています。

お問い合わせ

名古屋友禅黒紋付協同組合連合会

TEL 〇五二一七三一―六八一四